

言文一致体と現代日本語との関係性 翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して

クロス 尚 美

1. はじめに

若松賤子による Frances Hodgson Burnett の『Little Lord Fauntleroy』(1886)の翻訳『小公子』は、原作の初版出版のわずか4年後の1890年(明治23年)から、『女学雑誌』に連載が始まっている。Cross (2013)では、「若松賤子が現代日本語の原点である」という仮説をたて、『小公子』が英語の原作からの言文一致体による翻訳であるという特徴を踏まえて、文体の検証を行った。また日英翻訳の先行研究で指摘されている Class Shift (品詞転換)を基に、Kizu and Cross (2013)では、『Little Lord Fauntleroy』(以下 LLF と略す)とその邦訳のうち、およそ100年を経て翻訳された二作品、若松賤子訳(1890-1892)と坂崎麻子訳(1987)との比較を行い、英日翻訳の場合のオノマトペの品詞転換についても規則性が見られることを報告している。本論ではさらに若松賤子訳と坂崎麻子訳に使われるオノマトペ表現を対照比較することで、その特徴をまとめ、Cross (2013)の仮説の妥当性を探る検証活動の一端としたい。

2. 研究の方法

本研究では、原作 LLF を Project Gutenberg からダウンロードしたものをデジタルコーパスとして使用している。若松訳は、当初連載された『女学雑誌』の複製版をもとにデジタル化されたものと、昭和3年に若松賤子の夫であり、『女学雑誌』の編集者でもあった巖本善治が編集して単行本化されたものをデジタル化し、一般公開されたものの2種類がある。明治20年代の言文一致体なるべくそのままの形で比較するため、誤植や誤字があり、漢字仮名表記に揺れの多い『女学雑誌』掲載版を基データとし、漢字熟語の読み方や、表記の確認のために巖本編集版を参考に用いた。1987年に出版された坂崎の翻訳については、これを PDF 化したのち OCR 処理をし、デジタル化されたデータとして

使用した。OCR 処理の精度が低い箇所もみられたので、原本との照らし合わせを随時行い、取り込みもれがないように努めた。

オノマトペ語彙は若松訳にみられる繰り返し符号を用いず、仮名、漢字を問わず、同じ文字を繰り返して表記した。例えば「きら\」と表記されているものは、統計処理上「きらきら」とした。また若松訳では仮名遣いに揺れがみられたが、これは同義語と思われるものをひとつにまとめて扱った。例として、「ヂツト、ヂツと、じつと、じつと」があげられる。表記と語義とを意識して区別してと思われる個所については、別語として扱った。別語扱いの対象となったものは1例あった。「キツト」と「キツと」である。前者が「確実な、おそらく」といった意味で使われているのに対し、後者は登場人物の表情が強ばり、きつい印象を与えているという意味で使われている。

3. オノマトペとは

3.1 オノマトペの定義

オノマトペに焦点を当てて若松賤子訳と坂崎麻子訳を対象比較していくにあたり、まず問題となるのが、どのような語群をオノマトペとして認めるかである。オノマトペの定義には、形態論、統語論、語彙論などそれぞれの立場から様々なものがあるが、擬態語、擬声語、擬音語を取りまとめてオノマトペと総称することが多い。本論でもこれに従う。統語論に基づく主なオノマトペ動詞の定義をまとめると、次のようになる。オノマトペとは、通常の語彙と異なり、感覚的感情的な意味をもつもの (Kita, 1997) であるが、単独でも意味をもたず、それをを用いる構文内で具体的な意味をもつもの (Tsuji-mura, 2001/2005) である。一方、「フラフラ、グズグズ、あっさり」の例にみられるように、明確な品詞も意味も統語機能ももたないかに見えるが、実際にはオノマトペも文法的に有意義な概念的意味を備えており、その意味的性質から統語構造の在り方が予測できる (影山2006) とされる。またオノマトペは日本語母語話者へのみ判別できる語群であり、感覚的に何がオノマトペで何がそうでないかは、視覚的 (漢字表記であるか、仮名表記であるか) または聴覚的 (音の反復や、促音、撥音、「り」で終わるなどの形態からの聞こえ) が影響していることも示唆されている (天沼1974、浅野1978、小野2007他)。つまりオノマトペとは感覚的感情的な意味をもつ特殊な語彙群であり、その形態もまちまちで、その使われ方としては副詞、形容動詞が多いが、派生語として動詞、名詞、形容詞となるものもあれば、複合語として連体修飾語として機能するものもでてくる。

これらを統語範疇として分析するために、さまざまな分類法が試みられている。分類方法としては、語源的分類、形態的分類などがあげられるが、語源的にも形態的にも分類の難しいオノマトベが多く、角岡（2004）は一般語彙とオノマトベ語彙の双方の側面を兼ね備える語彙群としての「境界オノマトベ」と、似て非なるものとしての「疑似オノマトベ」というカテゴリを設け、「真正オノマトベ」とは区別している。田守・スコウラップ（2011:210）は日英の対照研究に基づき、日本語オノマトベの範疇化において、オノマトベ語彙には音韻的、形態的、統語的独自性がみられるとしている。また、現代日本語の表記法では、オノマトベの表記がカタカナあるいはひらがなが用いられることも、オノマトベという独立した範疇の存在を反映している（田守・スコウラップ2011:211）。特に日本語オノマトベの音韻的独自性については、連濁現象の比較分析を行い、オノマトベは連濁の起こる語彙群からは独立していることを指摘し、連濁を含む語は、形態的、統語的振る舞いにおいて共通点がみられたにしても、それはオノマトベではありえないと結論付けている（田守・スコウラップ2011:204-9）。

以上をもとに、若松訳、坂崎訳にみられる検証対象語彙群の見直しを行った。その一例として挙げられるのは、若松訳に10回使われている「さえざえ」である。これは反復語であり、ひらがなで表記されていて漢字は使われていないこと、出現の状況からサ行音のもつ爽やかさ、明るさ、晴れやかさを意識した意味合いを持つと考えられることなど、オノマトベ語彙に共通する性質があるが、連濁がおこる語彙であることから、オノマトベとしては扱わなかった。

3.2 語源によるオノマトベの分類

角岡（2004）は、オノマトベの中でも語源のはっきりしている擬音語と違い、擬態語の場合、語源をさかのぼってみて、実詞、すなわち形容詞、動詞、形容動詞などの統語範疇から派生した語は、純粋なオノマトベ、つまり角岡の定義する「真正オノマトベ」とみなさないとしている。オノマトベには2モーラからなる語基が反復、あるいは交替して形成されるものが多いが、そのときに連濁がおこるものは、語源が他の品詞が求められるからであり、原則としてオノマトベではないとしている。例外として、反復型のオノマトベとしては、Kakchi et al. (1996) に収録されている「さめざめ」と「ちりちり」を挙げ、また交替型の場合は「てきばき」を認めている。

日本語オノマトベ語彙は、固有の語形をもつ、共時的な語彙群と考えられてきた（Kakchi et al. 1996）が、角岡（2003）は語源を遡及することなしに形態的特徴などの限定された側面のみに着目している限り、「閉じられた系」と

して一般語彙から識別可能であるとしている。

「にこにこ、にこっ(と)、にこり」など、一連の笑顔を表現する語彙群については、語源に実詞が遡及できることから角岡(2004)ではオノマトペとして認めていないが、これらが若松訳、坂崎訳における使用頻度が高く、現代にも共通する意味をもち、語源は通常意識されていないと思われること、また小野(2007)にも収録されていることなどから、本稿ではオノマトペとして扱う。

3.3 オノマトペ語彙の形態的分類

オノマトペ表現の語彙化の程度を統語範疇として認識するため、Kakehi(1981)の分類をもとに、田守(1991)が修正を加えた4段階分類法について、角岡(2004)がまとめているので、本稿でもこれに従う。一番語彙化の程度の低いレベル1の語彙には、流行語の類が含まれる。その1例として、映画の宣伝文句として出現し、その後忘れ去られたかに見える「ガビューン」(寛1993:140)を挙げている。レベル2の語彙の特徴は、必ず助詞の「と」を伴うことであり、その例としては「コケッコォと(鳴く)」と「ギャーと(悲鳴をあげる)」を挙げている。語彙化のレベルがさらに上がって、レベル3の語彙としては「する」「だ」「～になる」などが後続して全体として一つの語になるもの、「と」を随意的に伴うものがあり、後者の例としては、「とほとほ(と)歩いて行った」を挙げている。さらにレベル3のオノマトペとしては、「に」を伴う語彙群がある。その一例として、田守(1991:122-3)は「ずたずたに」を挙げ、結果を表すオノマトペ語彙として安定していると述べている。最後にレベル4であるが、これはオノマトペ語彙に基づく各種の派生語であり(角岡2004)、「～する」「～つく」「～めく」「～ける」「～る」がついて動詞化するものがある。「～する」以外の動詞語尾については、それに接続する語幹の部分が2モーラの語基で反復系のあるものに限るとしている。例としては、「べとつく」と「べとべと」、「ゆらめく」と「ゆらゆら」、「いじける」と「いじいじ」などが挙げられている。以上をまとめたものが表1である。

表1 オノマトペ語彙の語彙化のレベル

レベル 1	短期間で使われなくなる一過性のオノマトペ表現
レベル 2	必ず「と」を伴うオノマトペ
レベル 3	「～する、～だ、～になる」を伴って全体として一語になるもの、随意的に「と」を伴うもの、「に」を伴うもの

レベル 4	「～する」がついて動詞化するもの、反復語の語基+「～つく、～めく、～ける、～る」で動詞化するもの
-------	--

本稿では現行のオノマトベ辞典として最多の語彙（4500語）を収録する小野正弘編『日本語オノマトベ辞典』2007年に含まれる語彙群を第一義のオノマトベとし、同辞典に含まれない語彙についても、角岡（2004）、影山（2006）を参照しながら統語的、形態論的に、また語源も視野に含めたうえで語彙を分類し、明治期の言文一致体を代表する若松賤子の翻訳に使用されるオノマトベと、同じ原作の現代訳である坂崎麻子訳のそれとの、100年を隔てた共通性に注目する。

次に、語源を考慮しながらも音形に注目して、本稿の検証対象語を9つのタイプに分類する。

1) 語基反復型

オノマトベ語彙の中でも典型的なもので、2拍からなる語基が重なって形成され、4拍の語となることが多い。例としては「きらきら」が挙げられる。反復型のオノマトベにさらに2拍、4拍、6拍、8拍からなる語を形成することがあるが、これ本稿の検証対象語の中では、若松訳に「ガヤガヤドヤドヤ」と「トットトットツ」の8拍からなる語が2例見られた。前者は4拍語2語とみなし、後者は8拍の反復語1語とみなす。

2) 交替型

オノマトベ語彙の中で、異なる語基が交替しているもの（角岡2005）の例として、「むしゃくしゃ」や「ぎくしゃく」があげられる。

3) ○っ○り型

第2拍に促音のはいる形であり、全体としては4拍語となる。例として、「ひっそり」、「すっきり」が挙げられる。

4) ○ん○り型

第2拍に撥音がはいり、最後が「り」でおわる形であり、全体としては4拍語となることが多い。例として、「ちゃんほり」、「ほんやり」などがある。「～する」が後続して動詞を形成することが多く、助詞の「と」を伴わなくとも1語を形成できる。語彙化の程度の分析（表1参照）ではレベル3に相当し、高度に語彙化しているといえる。

5) ○っ（と）型

オノマトベ語基が促音になる語彙で、助詞の「と」を伴う。これは語源による分析のレベル2に相当し、例としては「じっと」や「そっと」

などが挙げられる。語基が2拍で、助詞を含む3拍語となることが多いが、中には3拍、あるいはそれ以上になることもある。「ぱちっと」や「そうっと」などがある。助詞の「と」がなくては語として機能しないため、形態による分類ではレベル2となる。

6) ○ん(と)型

2拍目あるいは3拍目に撥音がきて、そのあとに助詞の「と」を必要とする語彙には、「しゃんと(背をのぼす)」や「びょんと(飛び降りる)」などがある。長音のあとに撥音がくるものとしては、「しーんと」や「ぼーっと」が挙げられる。また「～する」をつけて動詞化したのち語彙のうち、「～とした」が後続して連体修飾語として機能するものがあり、例としては「きちんとした(食事、教育、くらし)」があらる。「～と」は何れの場合も必須であるため、形態的分類ではレベル2に相当する

7) ○○り(と)型

オノマトペ語彙の最後が「り」となるものには、助詞の「と」を必要とするものと、独立語としてまたは複合語を形成して機能するものの二種類がある。前者の例としては「がくりと」、「きりりと」などの擬態語があり、後者の例としては、「ちらり」や「ずばり」、複合語になりやすい「へたり(こむ)」が挙げられる。複合語として現れるものについては、次の「複合語」に分類する。

8) 複合語

反復型オノマトペ語彙の語基2拍と、動作や状態を表す別の語彙との結合で生じるもので、例としては「きらめく」「ざわつく」「ブラさがる」などがある。これらの語彙は、語源分類ではレベル4となり、オノマトペ語彙に基づく派生語として扱われるため、通常オノマトペ辞書に取り上げられることはないが、本稿ではオノマトペとして扱う。

9) その他特殊型

以上の8つの分類から外れるものを、特殊型としてまとめた。例としては、擬声語と考えられる「ムフフッと」や、「あっけらかん」(本稿4.6参照)などが含まれる。

次に、この形態分類に基づき、若松訳、坂崎訳に含まれるオノマトペの検証を進めていく。

4. オノマトベの検証

前章では、本稿で用いるオノマトベの定義を明らかにし、その分類方法を定めた。次に若松訳、坂崎訳にみられるオノマトベを分類し、検証していく。

4.1 形態によるオノマトベの分類

若松訳、坂崎訳に見られるオノマトベ表現を9つのタイプに形態分類し、異なり語と延べ数に分けてまとめたものが、表2である。

表2 若松訳・坂崎訳に見られるオノマトベの形態分類

異なり語数

	若松訳	坂崎訳
語基反復型	58	67
交替型	1	2
○っ○り型	21	20
○ん○り型	8	3
○っ(と)型	16	19
○ん(と)型	5	14
○○り(と)型	2	14
複合語	6	2
その他特殊型	5	9
合計	122	150

延べ語数

	若松訳	坂崎訳
語基反復型	108	124
交替型	1	4
○っ○り型	85	142
○ん○り型	16	3
○っ(と)型	95	81
○ん(と)型	13	34
○○り(と)型	3	23
複合語	8	2
その他特殊型	10	16
合計	339	429

若松訳に見られるオノマトベ形態分布と坂崎訳のそれとの間には、異なり語数ベース、延べ語数ベースで比べても、両者の間にそれぞれ0.9571、0.918738という強い正の相関関係がみられる。これが「疑似相関」でなく、真の相関関係であるならば、若松訳の形態分布が坂崎訳のその原型となっていなくてはならない。言い換えれば、若松訳におけるオノマトベの形態分布が、坂崎訳に直接影響を与えて、正比例の相関関係をうみだしていなくてはならない。もともとの仮説である「若松賤子の言文一致体が現代日本語の起源である」ということの「証明」がなされて、初めて重要な意味をもつ統計値であるといえる。

4.2 オノマトベ語彙の拍数分布

角岡(2004)は、Kakehi et al.(1996)の分類に基づき、拍数(モーラ数)

の分布状況を算出しているが、最も多いのが4拍語、次に3拍語となっている。本研究でも、拍数の分布に同様の傾向がみられた。これを表3にまとめる。

表3 オノマトベの拍数分布

	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍
若松訳	5	113	216	3	1	0	1
坂崎訳	9	110	307	1	1	1	0

オノマトベの拍数分布は、相関係数1を提示する。その妥当性については、本稿4.1で述べたように現段階では疑似相関とするしかなく、さらなる検証を今後の研究課題とする。

4.3 オノマトベの表記

坂崎は、現代の正書法に基づき、「パチン」や「ピン」などの擬音語の場合にのみ、カタカナを用いており、擬態語はすべてひらがな表記であり、漢字表記の例はない。

若松訳では、大半のオノマトベ語彙がカタカナで表記されているが、ひらがな表記、または「そうつと」や「ぼつと」のように、促音部分だけがカタカナ表記となるものも少数見られた。漢字表記は「艶」と「萎」の二語のみで、何れも反復記号を伴って疊語として使われている。本稿では便宜上反復記号として「々」を用いる。漢字語義に由来する副詞は、疊語のように形状的にはオノマトベに類似していても、角岡（2004）は真正オノマトベとはいえないと主張する。しかし、「艶」は「つや」という和語からきており、「つやつや」は源氏物語・若紫¹にも見られる和語疊語であり、若松訳、坂崎訳での使用例と同様に、光沢があって美しい頭髮を意味する。「萎々」の読みは、その出現環境から「しほしほ」であると推測できるが、こちらも意味に通じる漢字をあててはいるが、御伽草子—横笛²の草紙に近似した用例がみられることから、これも本稿ではオノマトベとして扱う。

中里（2001）は、明治前期のオノマトベの使用状況について、漢語系のもの

- 1 「こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたうみゆ」こぼれかかった髪が艶々とすばらしく見える（筆者訳）
- 2 「女にておはしまさましかば、いかにしほしほと口惜しからまし」もし女性でおいでであそばしたなら、どんなにしょんぼりと残念そうでありましたでしょうか（筆者訳）

言文一致体と現代日本語との関係性 翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して

の割合が高く、言文一致文では俗語と認識されていた和語系オノマトペを多数取り入れながらも、それだけでは表現しきれない部分を漢語系のオノマトペで補ったとしている。その調査対象となった明治前期の五作品では、和語系が8割前後であったのに対し、後期の20作品では9割前後となっていて、和語系オノマトペの使用率が上がり、漢語系オノマトペが減少したと結論付けている。語彙として定着しているものほど仮名表記になりやすい（小野 2007）ことから、言文一致体の先駆的な作品であった若松訳『小公子』が、明治20年代にはまだ少数派であった和語系のオノマトペ（佐藤2006）を多用し、またそのほとんどを仮名表記していることは注目に値する。

4.4 延べ語数と異なり語数

若松訳、坂崎訳で使用されたオノマトペの数は、それぞれ延べ数が339、429であり、これを異なり語数でみると、122、150となる。これを表4にまとめる。

表4 オノマトペ出現数

	若松訳	坂崎訳
延べ語数	339	429
異なり語数	122	150

出現回数でみると、明治中期からのおよそ100年間に、延べ語数で26.5%、異なり語数で23.0%増えている。これは、明治前半の言文一致体が定着する前の時期においては、和語オノマトペが俗語とみなされ、漢語起源のオノマトペが多用されていたこと、明治後半になって積極的に和語オノマトペが使われるようになったこと（中里 2001）で説明できるのではないだろうか。

4.5 語彙別の使用頻度

次に異なり語の種類について考察する。若松訳と坂崎訳では、大きく重なる部分と、まったく異なる部分とに分けられる。使用頻度で上位15位までをまとめたのが、表5である。若松訳では表記に揺れがあるので、カタカナ、ひらがな、あるいは「じつと」のような仮名の組み合わせについても、ひとつの語彙として計上した。若松訳にみられる「キウキウ」は、その出現環境やのちに出版された『小公子』でも「きらきら」とされていることから、本稿ではこれらを同一の語彙とみなして計上した。

表5 使用頻度上位15語

順位	若松訳		坂崎訳	
	オノマトペ	総数	オノマトペ	総数
1	キツト キツと	22	びっくり	34
2	ヂツト じつと ジツト	21	じっと	30
3	ズツト ずつと	18	すっかり	25
4	ビツクリ(クラ)	15	きっと	18
5	にこにこ	12	はっきり	16
6	にっこり ニツコリ	12	きちんと(した)	13
7	きらきら キウキウ	10	そっくり	11
8	すつかり スツカリ	10	しっかり	9
9	シツカリ しつかり	9	にっこり	9
10	ヒヨツト(して、すると)	9	ゆっくり	9
11	そつくり ソツクリ	6	きらきら	8
12	チャント チヤンと	6	いらいら	7
13	ポツト	6	がっかり	7
14	モチモチ もじもじ	6	ほっと	6
15	さつぱり サツパリ	5	にこにこ	5

表5にあげた上位15組のオノマトペは、両訳に共通する「きっと」と「にっこり」をのぞくすべてが、三上(2006)の提唱する日本語教育のための基本オノマトペ70語に含まれている。「にっこり」は「にこにこ」と語源を同じくする派生語であり、基本語彙に含まれていなくても不思議はない。どちらの訳にも高頻度であられる「きっと」が三上の基本オノマトペに含まれていないことについてはさらに検証の必要があるが、若松訳に高頻度で使われているオノマトペ語彙が、現代の日本語教育でも重要視され、基本語彙として提唱されていることは興味深い。オノマトペが「共時的」に認識される(Kakehi et al. 1996)のであれば、若松訳と坂崎訳において使用されるオノマトペ語群に共通点が多くみられるということは、「共通性」が高い、つまりは若松賤子の言文一致体による文体と、現代日本語との関連性に関する主張の、ひとつの裏付けになるのではないだろうか。

さらに若松訳と頻度数上位10位のオノマトペ語彙で、若松訳と坂崎訳に共通するものが6語(組)ある。これを上位15位まで範囲を広げると、15語中9語が共通して両訳に現れる。これら二つの翻訳に共通する語彙は、必ずしも同じ

言文一致体と現代日本語との関係性 翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して

原文に対応する位置で出現しているとは限らない。若松訳、坂崎訳に共通する頻度の高い語彙を、若松訳を基準にして、坂崎訳の元の順位を右端に掲げたものを表6として提示する。若松訳、坂崎訳に共通しない語彙は、表6には含まない。

表6 使用頻度の高い語彙9組 若松訳、坂崎訳対照表

若松訳			坂崎訳		
元の順位	オノマトペ	総数	オノマトペ	総数	元の順位
1	キツト キツと	22	きっと	18	4
2	チツト ジツと ジツト	21	じっと	30	2
4	ビツクリ(クラ)	15	びっくり	34	1
5	にこにこ	12	にこにこ	5	15
6	にっこり ニツコリ	12	にっこり	9	9
7	きらきら キウキウ	10	きらきら	8	11
8	すつかり スツカリ	10	すっかり	25	3
9	シツカリ しつかり	9	しっかり	9	8
11	そつくり ソツクリ	6	そっくり	11	7

4.6 オノマトペ使用状況の同異

オノマトペ語彙の出現数においては、若松訳と坂崎訳に多くの共通点が見られた。次に、同じ語彙が同じ原文の同じ部分の訳に使われているかの考察をする。若松訳と坂崎訳におけるオノマトペ語彙の同等箇所を使用される頻度については、表7にまとめる。

表7 同等箇所を使用したオノマトペ

	若松訳	坂崎訳	頻度
1	チツト/ジツト	じっと	6
2	キツト	きっと	4
3	ビツクリ	びっくり	3
4	ニツコリ	にっこり	3
5	ニコニコ	にこにこ	3
6	スツカリ	すっかり	2
7	ハツキリ	はっきり	1

表8 近似表現

	若松訳	坂崎訳	頻度
1	きらきら	つやつや	2
2	チツト	まじまじ	2
3	ポツト ポツト	ぱっと	2
4	ガツシリ	どっしり	1
5	ギシギシ	ぎっしり	1
6	ギョツト	びっくり	1
7	くるくる	くるりと	1

8	ぶつぶつ	ぶつぶつ	1
9	カヤガヤ	がやがや	1
10	ホツト	ほっと	1
11	きらきら/キウキウ	きらきら	2
12	ドツシリ	どっしり	1
13	ゴロゴロ	ごろごろ	1
14	シツカリ	しっかり	1
15	艶々	つやつや	1
16	ぶらぶら	ぶらぶら	1
17	シヤント	しゃんと	1
18	パチンと	パチンと	1
19	ゲルゲル	ぐるぐる	1
合計			35

8	じツト	ぎろぎろ	1
9	ツングリ	がっしり	1
10	ドツキリ	びくっと	1
11	ニコニコ	にっこり	1
12	ニタニタ	にやにや	1
13	にツこり	にこりと	1
14	ハキハキ	はっきり	1
15	パチつかせる	ばちばち	1
16	ピカピカ	ちかちか	1
17	ビツクリ	はっと	1
18	ビツシヤリ	ばたんと	1
19	フツサリ	もしゃもしゃ	1
20	ブラさげて	ぶらぶら	1
21	ゆすぶられる	ゆさゆさ	1
22	ゆるゆる	ゆっくり	1
合計			25

若松訳と坂崎訳で同じところで同じオノマトベが使われたのは35か所のみである。次に、若松訳と坂崎訳で、近似表現が同じ翻訳箇所に使われているかをまとめたのが表8である。ここで近似表現とは、形態が似ているものだけではなく、同義語として小野（2007）で確認できるものを指す。

表7と表8とを比較してみると、同一のものだけでなく近似した表現を含むオノマトベ語彙の同等箇所に出現する頻度は60件となる。これは若松訳の場合オノマトベ延べ数の17.7%、坂崎訳の場合は14.0%であり同等箇所に同じオノマトベが使われる率が高いとは言えない。

さらに、出現頻度差の大きいものをまとめたのが表9である。

表9 出現頻度の差が大きい語彙 対照表

順位	若松訳		坂崎訳	
	オノマトベ	頻度	オノマトベ	頻度
1	ズツト ずつと	18		0
2	ヒヨツト	9		0

3	チャント	6		0
4	ポツト	6		0
5	モジモジ もじもじ	6		0
6	ハツキリ	2	はっきり	16
7	ホツト	2	ほっと	6
8	ユツクリ	1	ゆっくり	9
9	イライラ	1	いらいら	7
10		0	きちんと	13

若松役での出現頻度が6回以上あって、坂崎ではゼロである5語は、すべて小野（2007）に収録されている。また、坂崎で多用されているオノマトペ5語は、「きちんと」を除き、若松役でも多少なりとも出現する。これら5語も、すべて小野（2007）に収録されている。

以上から、若松訳と坂崎訳では、同じ、あるいは近似したオノマトペが同等箇所に使われる可能性は低く、どちらか一方にあって、もう一方にないものの出現頻度の差も大きいことがわかる。しかしながら、どのオノマトペ語彙も容易に他の一般語彙で置き換えられるものであり、とくに『小公子』が児童文学であり、もともと平易な表現が使われていることを考え合わせると、同じ翻訳文で同じオノマトペが使われなくとも不思議はない。むしろ、全体としてどのような形態的特徴をもつオノマトペが、どのような頻度で使われているかのほうが有意義な比較ではないだろうか。

若松訳で6回、坂崎訳では46回登場した「ちょっと」については、本稿ではオノマトペに含めていない。小さいもの、細かいものを意味する「チ」ではじまる語彙は多数あり、その多くがオノマトペとして小野（2007）に挙げられている。しかし、「ちと」、「ちよいと」はあっても、オノマトペとしての「ちょっと」に言及した先行研究が見いだせなかった。今後の課題としたい。

6. まとめ

オノマトペ総数や共通する語彙から、同じ英文学作品を100年隔てて翻訳した若松隆子と坂崎麻子の作品には多くの共通点が見られる。オノマトペの使用状況から判明したことは、1) 若松訳には明治期前半の文語体の特徴でもあった漢語オノマトペがみられず、ほとんどのオノマトペが仮名表記であり、これは坂崎訳と共通していること、2) 若松訳と坂崎訳では同じ語形、同義の和語

オノマトベが多用されており、その延べ語数、異なり語数の時代的な増加は、和語オノマトベが言文一致体以降、その使用例が増加したことから説明しうること、3) 音的形態的に9つに分類されたオノマトベの分布においては、若松訳と坂崎訳との間に共通した傾向がみられることである。以上から、本稿は若松訳と坂崎訳におけるオノマトベの使用に、時代を超えた「共通性」がみられると結論付ける。さらに、これは明治中期の言文一致体の先駆け的な作品である若松賤子の『小公子』が、その同時代の他の作品よりも、現代日本語の坂崎訳に近似したものであり、本研究の前提としての「若松賤子の言文一致体が現代日本語の原点である」という仮説を支持する検証結果が得られたと考える。

引用文献

- Cross Naomi (2013) 'The duality of the Japanese vernacular movement and the emergence of modern Japanese: The role of Wakamatsu Shizuko, "Study of Languages" No. 1 Himeji Dokkyo University
- Kakehi Hisao, Tamori Ikuo, Schourup Lawrence. (1996). "Dictionary of Iconic Expressions in Japanese" 2vols. Mouton de Gruyter.
- Kizu Mika and Cross Naomi. (2013) 'Translating into Japanese Mimetics: A case study of Shōkōshi (Little Lord Fauntleroy) in the Meiji era and the present time' presented in the Grammar of Mimetics Workshop, SOAS University of London on 10 May 2013
- Tsujimura Natsuko (2001) 'Revisiting the two-dimensional approach to mimetics: A reply to Kita (1997)' "Linguistics" 39:409-418
- Tsujimura Natusko (2005) 'A constructional approach to mimetic verbs' in Mirjam Fried and Hans Boas (eds.) "Grammatical Construction" 137-154 John Benjamins.
- 浅野鶴子編 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』 角川出版
- 天沼寧 (1974) 『擬音語・擬態語辞典』 東京堂出版
- 小野正弘編 (2007) 『日本語オノマトベ辞典』 小学館
- 筧壽雄 (1993) 「文学作品に見られるオノマトベ表現の日英対照」 筧・田守 (編) 『オノマトピア』 勁草書房
- 影山太郎 (2006) 「擬態語動詞の統語構造」 『人文研究』 関西学院大学 56 (1) 83-101
- 角岡賢一 (2003) 日本語オノマトベ語基の多義性について 『龍谷大学国際センター研究年報』 第12号, 23-44

言文一致体と現代日本語との関係性 翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して

- 角岡賢一 (2004) 「日本語オノマトペ語彙の語源について」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第13号, 15-16
- 角岡賢一 (2005) 「日本語オノマトペの交替形語彙分布」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第14号, 39-57
- 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体型性について』 くろしお出版
- 佐々木文彦 (2002) 「オノマトペの語義の変遷について - 「ほのほの」「つやつや」を例に-」 『明海日本語』 第17号, 17-27
- 佐藤有紀 (2006) 「明治期における擬音語・擬態語の漢字表記」. 『日本アジア研究』 第3号, 43-57
- 中里理子 (2001) 「明治後期の和語系・漢語系オノマトペ」 『上越教育大学紀要』 第20巻 第2号, 562-574
- 中里理子 (2007) 「笑いを描写するオノマトペの変遷」 『上越教育大学研究紀要』 第26巻, 1-14
- バーネット作 坂崎麻子訳 (1987, 2006) 『小公子』 偕成社文庫
- 三上京子 (2006) 「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」 『ICU日本語教育研究』 3, 49-63

デジタル・アーカイブ

- Burnett Hodgson Frances (日付不明) Little Lord Fauntleroy. 参照日: 2013年10月27日, 参照先: Project Gutenberg: <http://www.gutenberg.org/ebooks/479>
- バーネット作 若松賤子訳. (日付不明) Internet Archive Wayback Machine 参照日: 2013年10月27日, 参照先: タイトル: 小公子 (Little Lord Fauntleroy, 1886): <http://web.archive.org/web/20040818094547/http://www.sm.rim.or.jp/~osawa/AGG/llf/index.html>
- バーネット著 若松志づ子訳. (日付不明) 小公子 (明治30年出版、博文館発行) 参照日: 2013年10月27日, 参照先: 近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168374>
- 国立国語研究所 (日付不明). 日本語を楽しもう - オノマトペ 参照日: 2013年10月27日 参照先: <https://dbms.ninjal.ac.jp/nknet/Onomatope/category.html>

In Search of Evidence for the Link between Meiji Vernacular Writing and Modern Japanese —A Study of Onomatopoeia in “Shokoshi” —

Naomi Cross

Wakamatsu Shizuko translated “Little Lord Fauntleroy” by Frances Hodgson Barnett (1886) into vernacular Japanese and serialized it in “Jogaku-Zasshi” from 1890-1892, merely four years after the first publication of the original. Considering the unique upbringing of Wakamatsu and her educational background, Cross (2013) argued that her vernacular writing was strongly influenced by her “second mother-tongue” English, and put forward the hypothesis that Wakamatsu’s vernacular writing was the origin of modern Japanese. As a part of the ongoing process of gathering evidence to support this hypothesis, this paper focuses on the use of onomatopoeia in the two translations of “Little Lord Fauntleroy”, one by Wakamatsu Shizuko and the other by a modern translator Sakazaki Asako, published in 1987, almost one hundred years apart from the original publication. This paper reports that 1) Wakamatsu, unlike her contemporaries does not use onomatopoeia of Chinese origin, and this is indeed the case with Sakazaki, 2) there is a strong positive correlation between the Wakamatsu version and the Sakazaki version in terms of the total number and the number of different onomatopoeia used, and 3) there is also a strong correlation between the typological distribution of onomatopoeia. There are, however, some differences in the use of certain onomatopoeia, some in their meanings and others in terms of concurrence. This may be explained as a developmental phenomenon over the one hundred year period between the above publications. This paper concludes that there is a strong synergy between the two versions of translation in terms of the use of onomatopoeia and this synergy in turn provides supporting evidence to the author’s hypothesis that Wakamatsu was a leading contributor to what has become modern day Japanese.